

看護師養成学校の手術室実習科目責任者が認識する 看護基礎教育において手術室実習が必要な理由と課題

帆苺 真由美 小林 祐子 清水 理恵

新潟青陵大学看護学部看護学科

Survey responses of educators in charge of surgical-nursing practicum at nursing-education institutions: Reasons for the necessity of surgical-nursing practicum as part of basic nursing education, and areas for improvement in these practicum

Mayumi Hokari Yuko Kobayashi Rie Shimizu

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Niigata Seiryō University

要旨

看護基礎教育において手術室実習の科目責任者が認識している手術室実習が必要な理由と課題を明らかにすることを目的に本研究を行った。対象者は国内の看護師養成学校において手術室実習の科目責任者である看護教員292名とした。対象者の95.5%が手術室実習は必要であると回答した。手術室実習が必要な理由と課題については、質的統合法（KJ法）で分析を行った。手術室実習は『手術療法が行われる治療の場の理解』『座学だけではイメージすることが難しい身体侵襲の理解』『患者とともにいることで可能となる心理面の理解』『看護を行う上で欠かせないチーム医療の理解』『手術看護にも共通して存在する看護の理解』『未知の領域となりやすい手術看護の理解』のために必要であり、学生を受け入れることによる『感染管理の問題や体調不良者の発生』、学生の『興味関心レベルから抜け出せない学び』、教員の『対象選定の限界』『少ない臨床経験を補うための指導力の向上』、手術室看護師の『臨床経験の豊かさを活かした関わり』、教員と手術室看護師の『手術室実習の目的共有と連携・協働』が課題として明らかとなった。

キーワード

看護基礎教育、手術室実習、手術看護、周手術期看護、科目責任者

Abstract

This study attempted to elucidate the reasons for the necessity of surgical-nursing practicum, as well as issues they still face, from a survey of nurse educators. The respondents were 292 nurse educators in charge of surgical-nursing practicum at their nursing-education institution in Japan. 95.5% emphasized the need for these practicum in student training, and their responses – about the need for practicum, and areas for improvement – were analyzed using a qualitative synthesis (KJ) method.

Reasons for the necessity of practicum included allowing students to better understand: the surgical treatment setting and surroundings; the physical invasiveness of the surgery (difficult to grasp through class study); the patients' psychological condition through student-patient interactions; the importance of medical-team cooperation in nursing practice; general nursing in light of its connections to surgical nursing, as well as surgical nursing itself (often poorly-understood).

With respect to the students, areas for improvement were: their insufficient infection control, their own physical condition during the practicum, and the fact that they sometimes had no more than a casual interest in surgical nursing. Other issues involved: the limited availability of suitable patients for the practicum, improving educators' teaching ability to compensate for limited clinical experience, the ability of surgical-nursing supervisors to share their wealth of clinical experience, and mutual understanding and cooperation between educator and supervisor with respect to practicum objectives.

Key words

basic nursing education, surgical nursing practicum, surgical nursing, perioperative nursing, nurse educators

I はじめに

看護基礎教育において、2020年度保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正により、各養成所の裁量で領域ごとの実習単位数を一定程度自由に設定することが可能となり¹⁾、柔軟なカリキュラム編成や看護学生（以下、学生）の主体的な学びを推進していくことが看護基礎教育検討会報告書²⁾でも報告されている。看護学実習は次世代の看護系人材を育成する重要な教育・学修の場であり、実践へ適応する能力を修得する授業として、その具体的な方法は各大学が責任をもって決定する³⁾こととされている。看護基礎教育における手術室実習の必要性に関してはその専門性の高さから議論があるものの、手術室実習を行うことで学生は呼吸・循環管理、身体的・心理的苦痛、チーム連携など多くの学びを得ている⁴⁻⁸⁾ことから、各看護師養成学校で手術室実習に関わる教員は見学実習のレベルであれば必要であると考え、近年ではほとんどの看護師養成学校で手術室実習が行われている^{9,10)}。しかし先行研究の多くが、学生の学びの調査から各看護師養成学校で手術室実習に関わる教員が考察として手術室実習が必要な理由や課題を明らかにしたものであり、国内の看護師養成学校において手術室実習の科目責任者である看護教員（以下、科目責任者）が、手術室実習が必要な理由や課題をどのように認識しているのかを構造的に明らかにしている報告はみられない。科目責任者は、看護基礎教育における手術室実習の位置づけを理解した上で各養成所における手術室実習のカリキュラム編成に関わっている者であるため、科目責任者の認識を明らかにすることで、今後の看護基礎教育における手術室実習の在り方を検討する上で貴重な示唆が得られるものと考えられる。そこで、科目責任者が認識している手術室実習が必要な理由と課題を明らかにすることを目的に本研究を行った。

II 方法

1. 対象施設および対象者

2018年10月時点で、国内の文部科学大臣指定医療関係技術者養成学校として指定されていた看護師養成学校（大学・短期大学・専修学校）292校を対象施設とし、該当施設において科目責任者である看護教員292名を対象者とした。

2. 調査方法

2018年10～11月に、郵送による無記名自記式質問紙調査法で行った。大学・短期大学の看護学系の学科長および専修学校の学校長に対しては対象者を明記した研究依頼文、対象者に対しては研究依頼文と調査用紙と返信用封筒を郵送し、調査に協力可能な場合は調査用紙に回答し返送してもらった。

3. 調査内容

対象者の基本属性として、年齢、性別、所属機関、看護教育の経験年数、手術看護の経験の有無、手術看護の経験年数、手術看護認定看護師の資格の有無、最終学歴について質問した。また、科目責任者が認識する手術室実習の必要性（4件法）とその理由（自由記述）、手術室実習で課題と感じていること（自由記述）について質問し、記述された内容を対象データとした。

4. 分析方法

基本属性および手術室実習の必要性については、単純集計を行った。手術室実習が必要な理由と手術室実習で課題と感じていることについては、質的統合法（KJ法）¹¹⁾を用いて分析を行った。本研究は、手術室実習が必要な理由や課題について、科目責任者が認識している内容から、その構造を明らかにしたいと考えたため、この分析法を用いた。また質的統合法（KJ法）に精通した研究者から適

直スーパーバイズを受けて、信頼性と妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

新潟青陵大学倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号201809号）。研究協力を依頼する際には、研究の主旨、研究への協力は対象者の自由意思によること、協力しない場合でも不利益はないこと、調査用紙の回答と返送をもって同意とみなすこと、調査用紙返送後の研究協力中止は無記名のため削除が不可能であること、調査用紙および電子媒体は5年間鍵のかかる棚に保管した後に焼却および粉碎処分すること、結果の公表などについて研究依頼文に記載し、文書にて説明を行った。調査用紙は各自返信用封筒に入れ厳封し、返信用封筒に住所・氏名は記載せず返信してもらうことで、差出人が特定されないようにした。

Ⅲ 結果

1. 対象者の概要

配布数292部、回収数107部（回収率36.6%）、自由記述の無回答を除いた有効回答数89部（有効回答率83.2%）。対象者の基本属性は、平均年齢52.1±6.8歳、性別は女性77名（86.5%）、男性6名（6.7%）、所属機関は大学77校（86.5%）、短大3校（3.4%）、専修学校3校（3.4%）、看護教育の平均経験年数15.5±7.2年、手術看護の経験あり16名（18.0%）、経験なし67名（75.3%）。手術室実習の必要性については、必要である70名（78.7%）とやや必要である15名（16.9%）を合わせて、95.5%の教員が手術室実習は必要であると回答した（表1）。

2. 看護師養成学校の手術室実習科目責任者が認識する手術室実習が必要な理由

科目責任者が認識する手術室実習が必要な理由は、114枚の元ラベルから4段階のグル

表1 対象者の基本属性および手術室実習の必要性
n=89

		n	(%)
年齢	平均±標準偏差	52.1±6.8	
	20歳代	0	(0.0)
	30歳代	2	(2.2)
	40歳代	25	(28.1)
	50歳代	41	(46.1)
	60歳代	13	(14.6)
	無回答	8	(9.0)
性別	女性	77	(86.5)
	男性	6	(6.7)
	無回答	6	(6.7)
所属機関	国立大学	18	(20.2)
	公立大学	14	(15.7)
	私立大学	45	(50.6)
	公立・私立短期大学	3	(3.4)
	専修学校	3	(3.4)
	無回答	6	(6.7)
看護教育の経験年数	平均±標準偏差	15.5±7.2	
	5年未満	6	(6.7)
	5年以上10年未満	14	(15.7)
	10年以上20年未満	35	(39.3)
	20年以上30年未満	24	(27.0)
	30年以上	3	(3.4)
	無回答	7	(7.9)
手術看護の経験の有無	あり	16	(18.0)
	なし	67	(75.3)
	無回答	6	(6.7)
手術看護の経験年数	平均±標準偏差	7.1±4.8	
	5年未満	6	(6.7)
	5年以上10年未満	4	(4.5)
	10年以上20年未満	6	(6.7)
	20年以上30年未満	0	(0.0)
	30年以上	0	(0.0)
	無回答	6	(6.7)
	該当なし	67	(75.3)
手術看護認定看護師の資格の有無	あり	0	(0.0)
	なし	82	(92.1)
	無回答	7	(7.9)
最終学歴	大学院（博士）	42	(47.2)
	大学院（修士）	35	(39.3)
	学士	4	(4.5)
	短期大学（3年過程）	1	(1.1)
	専門学校（3年過程）	1	(1.1)
	無回答	6	(6.7)
手術室実習の必要性	必要である	70	(78.7)
	やや必要である	15	(16.9)
	あまり必要ではない	2	(2.2)
	必要ではない	1	(1.1)
	無回答	1	(1.1)

ープ編成を行い、6つの最終ラベルに統合された（図1）。科目責任者は、手術室実習は『手術療法が行われる治療の場の理解』を基盤にして、『座学だけではイメージすることが難しい身体侵襲の理解』と『患者とともにいることで可能となる心理面の理解』の両面から、『周手術期看護の繋がりを学ぶ場』と

認識していた。そして手術室実習は、周手術期看護という特定の領域における学びに限局することなく、『看護を行う上で欠かせないチーム医療の理解』や『手術看護にも共通して存在する看護の理解』にまで波及しており、『看護基礎教育における学びの場』であると認識していた。また手術室実習は『未知の領域となりやすい手術看護の理解』にまで波及し、看護職として従事していくための貴重な学びを得る場ともなっており必要な実習であると認識していた。【 】はシンボルマーク、〔 〕は事柄、[]はエッセンス、< >は最終ラベル、「 」は元ラベルを示す。以下シンボルマークごとに記述する。

1) 【周手術期看護の繋がりを学ぶ場：手術療法が行われる治療の場の理解】

最終ラベルは、<B008 手術室は、手術療法を選択した患者が治療を受ける場であり、手術看護を理解しなければ術前術後の看護も行えないため、手術室実習は周手術期看護を学ぶ上で欠かせない。>であった。「手術目

的で入院する患者にとって手術はその目的が行われる場所であるから、その目的の場所で行われている看護について知らなければ、術前術後の看護をきちんと行うことができないと思っている。」や「臨地実習において手術治療を選択した患者の看護を学ぶ上で、手術室実習は不可欠と考えている。そのため可能な限り受け持ち患者の手術見学を計画している。」など、手術室は手術療法が行われる治療の場であるため、手術看護を学ぶことは周手術期看護を学ぶ上で必須である。また「周手術期看護の一連の流れを理解するためには必要だと思います。」のように、手術看護を独立して学ぶのではなく、周手術期看護として一連の流れの中で学習すべきであると考えていた。

2) 【周手術期看護の繋がりを学ぶ場：座学だけではイメージすることが難しい身体侵襲の理解】

最終ラベルは、<C004 座学だけではイメージすることが難しい麻酔や手術による侵襲

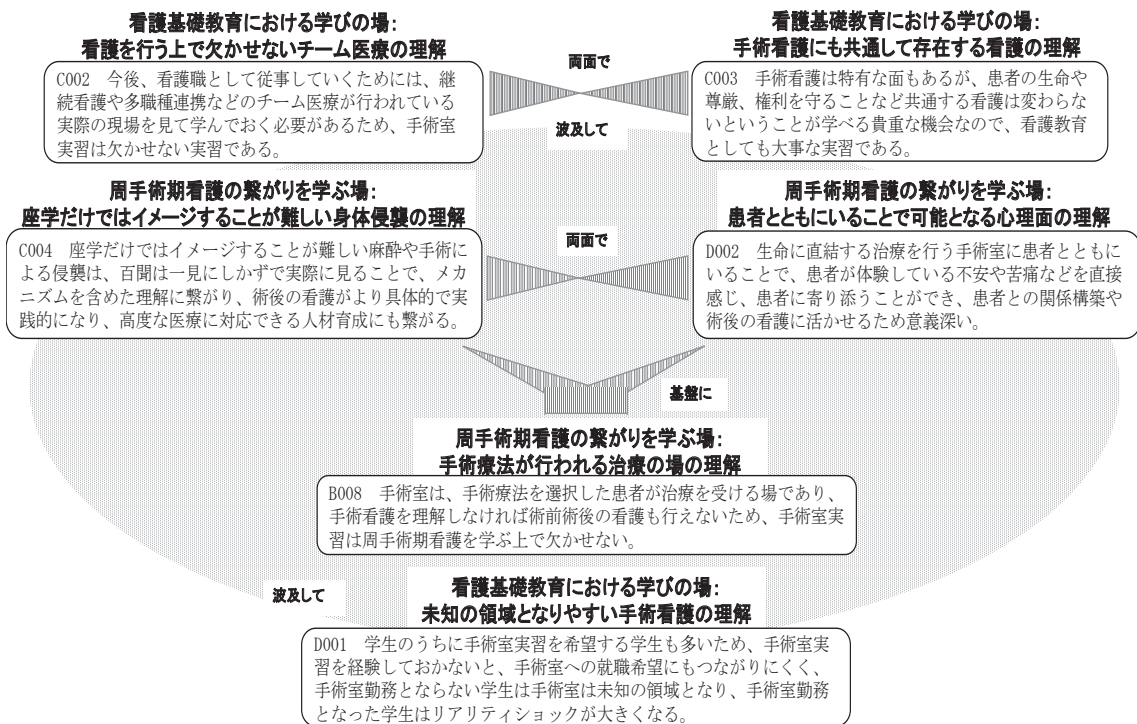


図1 科目責任者が認識する手術室実習が必要な理由（見取図）

は、百聞は一見にしかずで実際に見ることで、メカニズムを含めた理解に繋がり、術後の看護がより具体的で実践的になり、高度な医療に対応できる人材育成にも繋がる。>であった。多くの教員が、「麻酔、手術の侵襲を座学のみでイメージするのは難しい。」ため、「百聞は一見に如かず」で、手術室実習で実際に手術を見学することで「術中の侵襲をイメージしやすくなる。」と回答していた。また、単に麻酔や手術による侵襲がイメージしやすくなるだけでなく、「手術を見た事で術部のイメージが付き合併症との関連学習や看護に生かせる。」や「受け持ちの場合、患者に行われる治療とその侵襲を知っておく事はその後の看護のアセスメントに役立つ。」、「術後の看護実践につなげ、看護問題（合併症や機能障害）が生じる根拠やメカニズムの理解につながる。」など、術後合併症などを考える際にメカニズムを含めた理解が進みやすくなると述べていた。さらに、「手術中の身体内部を理解しないと、大卒に必要な看護実践能力を身に付けることができない。」、「高度な医療に対応できる人材を育成するため。」のように、高度な医療に対応できる看護実践能力を身につけるためにも手術室実習は必要であるという意見もあった。

3) 【周手術期看護の繋がりを学ぶ場：患者とともにいることで可能となる心理面の理解】

最終ラベルは、<D002 生命に直結する治療を行う手術室に患者とともにいることで、患者が体験している不安や苦痛などを直接感じ、患者に寄り添うことができ、患者との関係構築や術後の看護に活かせるため意義深い。>であった。手術室実習を行うことで、学生は「患者さんの不安な表情や言動から多くのことを感じてくれているため。」、「麻酔導入、手術室入室時の不安な様子を見て患者の心理面とそれに対する看護のあり方について考え

を深めることが可能になる。」。また「ある意味極限状態にある対象に寄り添う機会」であり、「手術を受ける患者がどのような体験をしているか、リアリティを持って学ぶことができる機会となるため。」、その場に居るからこそ感じ取れることも多い。「学生から、手術室実習をした後で受け持ち（病棟）実習をした方が患者を理解できるという意見を聞くことがある。」、「実際に起きている事を見ておく事で、術後の患者の苦痛に寄り添える。」など、手術室実習は患者に寄り添った看護を行うためにも重要な機会になると考えていた。

4) 【看護基礎教育における学びの場：看護を行う上で欠かせないチーム医療の理解】

最終ラベルは、<C002 今後、看護職として従事していくためには、継続看護や多職種連携などのチーム医療が行われている実際の現場を見て学んでおく必要があるため、手術室実習は欠かせない実習である。>であった。手術室実習は、「病棟、手術室という流れの中での継続看護を学べる機会にもなるため必要だと思います。」のように、継続看護を学ぶためには必要な実習であると考えていた。また同時に、「手術室、病棟、ICUとの連携についても学ぶことができる。」ということや、手術室には看護師以外の多くの職種が一堂に会し、各職種の役割を果たしながら連携しているため、「多職種連携を学べる機会にもなるため必要だと思います。」という意見もあった。これらのことから、手術室実習は継続看護や多職種連携をはじめとする「チーム医療を学ぶにあたり欠かせない。」ものと捉えていた。

5) 【看護基礎教育における学びの場：手術看護にも共通して存在する看護の理解】

最終ラベルは、<C003 手術看護は特有な面もあるが、患者の生命や尊厳、権利を守ることなど共通する看護は変わらないというこ

とが学べる貴重な機会なので、看護教育としても大事な実習である。>であった。「手術室に看護師がいる以上その仕事を学ぶ事は大切。」や「手術室でも看護活動が行われている事、その内容について理解させたく考えています。」など、手術室に看護師が配置されている理由を考えさせると同時に、「手術室の看護はかなり特有のものかと思うが、しかしその中でもどんな領域にも共通する看護は変わらないのだと学ぶため。」や「患者の尊厳、生命に直接かかわる看護、「看護とは」が学べるため。」に、手術室実習を行うことは看護の本質を学ぶ看護教育としても重要であると認識していた。

6) 【看護基礎教育における学びの場：未知の領域となりやすい手術看護の理解】

最終ラベルは、<D001 学生のうちに手術室実習を希望する学生も多いため、手術室実習を経験しておかないと、手術室への就職希望にもつながりにくく、手術室勤務とならない学生は手術室は未知の領域となり、手術室勤務となった学生はリアリティショックが大きくなる。>であった。「ナースになってからでは手術室の勤務とならない限り、手術場の現状を知ることが不可能に近い。」や「卒業生のうち手術室に配属される者は少数であることが予想されます。在学中に手術室看護を実習させなければその者にとって手術室はblack boxのようなものになる可能性があります。」のように手術室勤務となるケースは少ないため、学生のうちに経験させておく必要があるという意見があった。またそれとは逆に、看護師養成学校を「卒後、手術室に配属されることが多いことから、基本的なことは学習させることが必要と考える。」など手術室に配属となるケースは多いため、手術室で看護師として勤務するためには、手術室実習を行い手術看護を学習しておくことは必要であると考えていた。またこのカテゴリーの

中には、「手術室に就職を希望したり配属された時にリアリティショックが少なくなるよう、学生のうちに術中看護にふれてほしい。」や「この実習（手術室実習）以外でこれから先一生経験しないかもしれないため、普段みることがない馴染みのない手術室看護を経験してほしい。」という教員としての思いも含まれていた。

3. 看護師養成学校の手術室実習科目責任者が認識する手術室実習の課題

科目責任者が認識する手術室実習の課題は、83枚の元ラベルから4段階のグループ編成を行い、6つの最終ラベルに統合された(図2)。科目責任者は、手術室実習を行う上で『感染管理の問題や体調不良者の発生』が『手術室実習実施の阻害要因』、『興味関心レベルから抜け出せない学び』が『学びの深化の阻害要因』、『対象選定の限界』が『学びへの影響要因』と認識していた。手術室実習の実施が困難になってきているからこそ、手術室の実習指導に関わる教員は『少ない臨床経験を補うための指導力の向上』を図り、専門性の高い手術看護は学生にとって興味関心で留まってしまうがちであるからこそ、手術室看護師は『臨床経験の豊かさを活かした関わり』を行い、両面から学生の学びを支援していくことを求めている。多岐多様な手術室実習の状況下で学生が手術看護の学びを深めるためには、教員と手術室看護師が『手術室実習の目的共有と連携・協働』をして学生指導を行っていくことが課題であると認識していた。以下シンボルマークごとに記述する。

1) 【手術室実習実施の阻害要因：感染管理の問題や体調不良者の発生】

最終ラベルは、<C004 手術室実習が苦手ですストレスになる場合は、低侵襲の事例に変更するなどして対応できるが、病院側の感染管理の問題や学生の体調不良などの問題で、

手術室実習の実施が困難になってきている。>であった。「学生によっては（手術室実習に）興味を示さず、ストレスになるとの反応を示す。」や「手術室見学はそれを苦手とする学生がいることも確かですが、その場合は省くか、侵襲の比較的低い事例とします。」など、教員は学生のレディネスに合わせて可能な範囲で事例を調整しているが、「見学中に気分不快を訴える学生が多い時がある。その場合の継続の可否。」や「学生で迷走神経反射の既往がある場合、患者、学生双方の安全のため手術見学を除外している。」など安全管理上、手術室実習の実施や継続を中止せざるを得ない状況があった。また病院側からも「感染の面で医師より断られることが多い。」や「感染管理の問題から学生が手術室での実習を行えなくなっている。」など感染管理の観点から手術室実習の実施が困難になってきている状況があった。

最終ラベルは、<C002 学生が手術室実習の目的を理解できていないことや、受け持ち患者の手術室実習ができないこともあり、限られた日数の中での手術室実習だけでは、手術そのものへの興味関心で終わってしまい、専門性の高い手術看護を学び、適時に術後の看護に繋げることが難しい。>であった。「手術見学を通して麻酔や手術が患者の生体に及ぼす影響や手術侵襲について学んでほしいと考えているが、何をどのように見るか理解していない。単に手術を見ただけになってしまう。」や「学生自身が手術室見学の目的を十分に理解していないため、学びではなく感想のみとなってしまうこと。」など学生の学びが表面的な内容に留まっている要因として、実習目的の理解が不足していることが挙げられた。また「担当患者の手術に立会い、手術侵襲を実際に見て術後ケアに生かしてほしいが、それができない現状がある。」や専門性の高い部署であるため、「手術室看護師の役割に注目するより手術内容や状況に学生の意識が向きがちであり、イベント的な要素が多

2) 【学びの深化の阻害要因：興味関心レベルから抜け出せない学び】

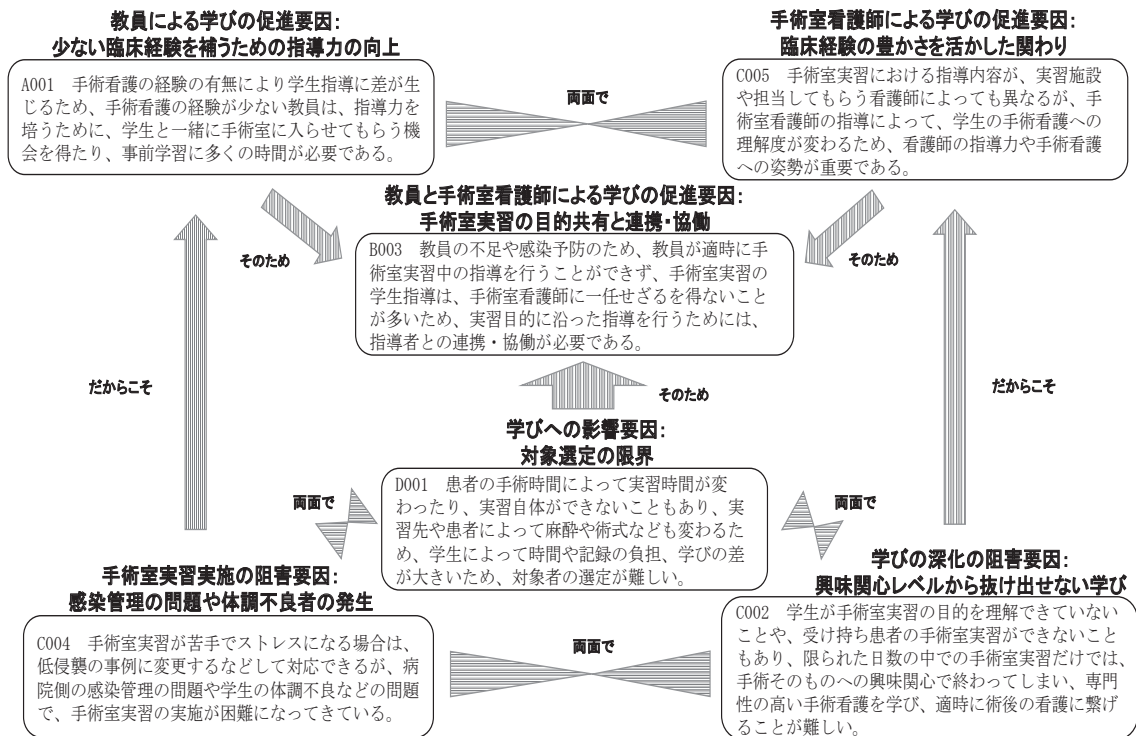


図2 科目責任者が認識する手術室実習の課題（見取図）

い気がします。』、「学生の興味で終わってしまう。いかに患者ケア（周手術期）に活かしていくか。」が課題として挙げられた。

3) 【学びへの影響要因：対象選定の限界】

最終ラベルは、<D001 患者の手術時間によって実習時間が変わったり、実習自体ができないこともあり、実習先や患者によって麻酔や術式なども変わるため、学生によって時間や記録の負担、学びの差が大きいため、対象者の選定が難しい。>であった。「実習日でも時間外になってしまったり、学内日にあたりたりして全員が手術室実習を経験できていない。」や「術直後から受け持ち開始となるなどの理由で、受け持ち患者の手術見学ができない学生が90名中5～6名位は毎年度いる。一例目の患者の退院後に二例目で見学できるように調整を行っているが、結果的に見学できずに実習を終了することもある。」など、実習時間や受け持ち患者の状況により手術室実習が行えない学生が存在していた。また「全身麻酔をみた学生と腰麻、局麻をみた学生では学びの差があるのかと感ずる時があります。』、「放射線管理下での手術室実習の理解がしにくい。」など麻酔や術式によって学生の学びの差が大きいため、患者選定に苦慮している状況があった。

4) 【教員による学びの促進要因：少ない臨床経験を補うための指導力の向上】

最終ラベルは、<A001 手術看護の経験の有無により学生指導に差が生じるため、手術看護の経験が少ない教員は、指導力を培うために、学生と一緒に手術室に入らせてもらう機会を得たり、事前学習に多くの時間が必要である。>であった。ここでは教員自身の課題として、「担当教員による指導の差（指導力の問題）」が挙げられた。特に手術看護の経験がない教員は、「手術看護の経験がないことでかなりの事前学習を要する。」状況が

あり、「手術室経験のある教官が少なく、手術室実習は手術室看護師に任せているが、教官も（手術室）見学に入り、術中看護や手術室実習について考える場を増やしてほしい。」といった、教員自身が手術看護を直接経験し学べる場を求めている。

5) 【手術室看護師による学びの促進要因：臨床経験の豊かさを活かした関わり】

最終ラベルは、<C005 手術室実習における指導内容が、実習施設や担当してもらう看護師によっても異なるが、手術室看護師の指導によって、学生の手術看護への理解度が変わるため、看護師の指導力や手術看護への姿勢が重要である。>であった。「外回り看護師が学生指導を行うが、人により指導内容がばらつく。』、「担当指導者により見学内容や視点にばらつきがあるかもしれない。」など、手術室での実習指導を担当する手術室看護師によって指導内容が異なる状況があった。しかし「臨床看護師の能力、言語化する力により、（学生の）学びが左右される。」や「指導者の態度が手術看護の印象に与える影響は大きいと思う。」のように、手術室実習における学生の学びを深めるためには、手術室看護師の指導力や手術看護への姿勢が重要であるため、それらを高めていくことが課題となっていた。

6) 【教員と手術室看護師による学びの促進要因：手術室実習の目的共有と連携・協働】

最終ラベルは、<B003 教員の不足や感染予防のため、教員が適時に手術室実習中の指導を行うことができず、手術室実習の学生指導は、手術室看護師に一任せざるを得ないことが多いため、実習目的に沿った指導を行うためには、指導者との連携・協働が必要である。>であった。手術室の実習指導を担当する「教員数が足りず、実習中の指導が不十分

のことがある。」や「実習病院が感染予防のため教員の手術室の立ち入りを禁止（学生だけの見学）しているため、看護師の指導がどの様に行われているのか把握しにくい。」など、教員の不足や感染予防のために、教員が手術室内に入ることができず、「実習指導を手術室看護師に一任しているためリアルタイムでの指導ができない。」など、手術室実習の指導は手術室看護師に委ねられている現状があった。そのため、「指導者との連携、協働した実習指導を行うことが課題です。」や「実習の意図が先方に十分理解いただくことが不可欠なのでその準備に努めなければ成果はないと考えております。」など、手術室実習を担当する教員と手術室看護師が手術室実習の目的を共有し、連携・協働していくことを課題と認識していた。

IV 考察

1. 看護基礎教育における手術室実習の必要性

本研究では、科目責任者である教員の95.5%が手術室実習は必要であると回答していた。手術室実習に関わる教員を対象とし所属機関の意見として回答を得た大滝らの研究では、手術室実習が必要であると回答した教員は77.1%であった¹⁰⁾ことから、手術室実習に関わる教員の中でも特に、科目責任者は手術室実習が必要であると考えている傾向にあることが示唆された。

科目責任者が手術室実習を必要であると考えている理由として、周手術期看護の理解のためであるという内容が中心的要素となっていた。手術室は手術療法を選択した患者が治療を受ける場であり、手術に伴う身体侵襲、不安や苦痛などの心理面は、実際に手術を見ることで理解が深まる。手術看護を理解しなければ手術前後の看護も行えないため、手術室実習は周手術期看護を学ぶ上で欠かせないものと

認識していた。さらに、チーム医療や手術室でも看護が行われていること、未知の領域となりやすい手術看護を理解するためにも手術室実習は必要であると捉えていた。手術室見学実習後に記述された学生の実習記録を分析した先行研究でも、手術室実習を行うことで、手術に伴う合併症や患者の身体的・精神的苦痛、多職種との連携、手術室看護師の役割^{5,6)}など、本研究の科目責任者が必要であると考えている内容と一致する内容が学べていることが示されている。学生が考える手術室看護の課題として、「コミュニケーションがとれない患者とどういふうに関わるのか考えていく必要がある」と対象と関わることを意味を考えている⁷⁾ように、手術室実習は、手術看護の中にも患者の尊厳や権利を守るといった基本的な看護師の役割があることを学ぶ貴重な場ともなっている。また手術室実習はイメージと現実とのギャップを修正する経験となる¹²⁾ため、手術室や救急部門などの専門分野への配属希望には、学生時代の専門的な実習経験が有効である¹³⁾とする研究結果もあり、これについても科目責任者の認識と一致している。学士課程におけるカリキュラム編成では、卒業後も自身で物事を考え組み立て、知識・技術を統合していく力を獲得できるように教授していくことが重要視されている¹⁴⁾。本研究では、科目責任者は周手術期看護や看護の本質の理解のために手術室実習が必要であり、これらの学びは看護基礎教育として必要不可欠なものと認識していた。看護職として従事していく上で、看護基礎教育において獲得すべき能力の育成のためには、手術室実習は実施すべき必要な実習であると言える。

2. 看護基礎教育における手術室実習の課題

科目責任者が認識する手術室実習の課題については、学生、教員、手術室看護師、各々の要因が存在し、それらの課題を解決するた

めには互いの認識を一致させていくことが必要であると考えていることが明らかとなった。

まず学生側の要因としては、長時間の手術室実習による体調不良の問題が挙げられた。手術室には特有の雰囲気や匂いなどもあり、それを苦手とする学生も存在する。また緊張や不安が強いことで体調不良に繋がる学生もいる。事前に手術室実習の実施が困難な学生が把握できれば調整することも可能だが、学生自身も認識していない場合もある。手術室実習の動画視聴により、手術看護への理解が深まることで手術室実習の不安が軽減した¹⁵⁾とする報告もあるため、学生が手術室実習をイメージした準備が整うように、近年看護基礎教育において取り入れられている情報通信技術 (ICT) やシミュレーション教育^{16,17)}を用いることも有効だと思われる。

また限られた実習日数での手術室実習では、学生は手術そのものへの興味関心で終わってしまい術後の看護に繋げることが難しい状況があった。手術室実習が興味関心レベルで留まってしまう要因として、学生が手術室実習の目的を理解できていないことや受け持ち患者の手術ではないことが挙げられていた。先行文献では、手術室実習における実習目標や行動目標に沿って、教員の指導の下に学生自身が目標を立案し手術室実習に臨むことで、目標以上の学びが得られた⁵⁾とする報告や、記録用紙を明確化することで学生が学ぶべき内容を理解しながら実習を行えた¹⁸⁾との報告がある。また手術室看護師に同行する手術室実習を行った群に比べ、受け持ち患者の手術室実習を行った群の方が、手術室実習への満足感が有意に高かった¹⁹⁾との報告もある。そのため受け持ち患者の手術室実習が実施できれば望ましいが、それが難しい場合には、チーム医療やリアルな身体侵襲の実感など、その手術室実習で学べる視点を整理し、目標を明確にして臨ませることで貴重な学びを得ることが可能であると言える。

局所麻酔や低侵襲手術、調整してもなお手術室実習ができなかった場合などは学生によって学びの差が大きくなるため、より学生の学びが得られる対象者を選定するように調整しているが、科目責任者はその調整が困難な状況であることを課題と捉えていた。しかし、局所麻酔や低侵襲手術は増加していくことが予測されると同時に、すべての学生が同じ条件で実習することは現実的に難しい。そのため、教員はその学生に対して、何を学ばせたいのかを方向づけ、また学生が学んだことを意味づけていくことが重要となってくる。手術室実習が必要な理由の中で、「百聞は一見に如かず」という記載も多かったが、手術を見たとしても学生一人の力では、見たことを意味づけ繋げていくことは難しい。教員の役割は、学生の直接的経験の意味づけを援助し学生の思考の整理に責任を持つことである²⁰⁾。また、専門性の高い手術看護についてタイミングを図り学生に学びの場を提供することは手術室看護師の役割であり、手術室看護師の指導によって学生の手術室実習の満足度は有意に高まる²¹⁾ことが明らかとなっている。本研究結果から、手術看護の経験がない教員は75.3%であり、大多数の教員が手術看護の経験がないという背景に鑑みると、可能な限り教員自身も臨地で手術看護の経験が積めるような制度も必要と言えるかもしれない。教員は手術室実習の目的や目標、学生のレディネスなどを手術室看護師に伝え、手術室看護師は手術室実習での指導内容や学生の様子などを教員に伝える、さらに教員は学生の実習記録などをもとに手術室看護師に学生の学びを伝えるなど、教員と手術室看護師が密に連携・協働していくことが求められる。

V 結論

科目責任者の95.5%が手術室実習は必要であると回答した。科目責任者が認識する手術

室実習が必要と考える理由は、〔手術療法が行われる治療の場の理解〕〔座学だけではイメージすることが難しい身体侵襲の理解〕〔患者とともにいることで可能となる心理面の理解〕〔看護を行う上で欠かせないチーム医療の理解〕〔手術看護にも共通して存在する看護の理解〕〔未知の領域となりやすい手術看護の理解〕のためであった。手術室実習の課題は、学生を受け入れることによる〔感染管理の問題や体調不良者の発生〕、学生の〔興味関心レベルから抜け出せない学び〕、教員の〔対象選定の限界〕〔少ない臨床経験を補うための指導力の向上〕、手術室看護師の〔臨床経験の豊かさを活かした関わり〕、教員と手術室看護師の〔手術室実習の目的共有と連携・協働〕であった。科目責任者は、諸々の課題を可能な限り調整し手術室実習を行うことは、周手術期看護のみならず看護基礎教育において必要であると認識していた。手術室実習は看護基礎教育において獲得すべき能力の育成のためにも貴重な学修機会である。

謝辞

本研究を行うにあたり調査にご協力いただきました皆さまに深く感謝申し上げます。なお、本研究は2018年度新潟青陵大学共同研究費による研究助成を受けて実施し、日本看護研究学会第46回学術集会で発表したものに加筆修正したものである。

文献

- 1) 一般社団法人日本看護系大学協議会. 令和2年度保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正と大学における適用の考え方. <https://www.janpu.or.jp/mext_mhlw_info/>. 2020年11月30日.
- 2) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書. <<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>>. 2020年12月5日.
- 3) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイドライン. <https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf>. 2021年1月10日.
- 4) 石渡智恵美. 周手術期看護実習における手術見学実習が受け持ち患者の術後看護へ及ぼした影響 - 周手術期看護実習における学習内容の検討 -. 帝京科学大学紀要. 2020; 16: 89-96.
- 5) 中井裕子, 笹山万紗代, 政時和美, 松井聡子. 手術室見学実習における看護学生の学び. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2020; 17: 71-77.
- 6) 堀越政孝, 辻村弘美, 恩幣宏美, 武居明美, 斉藤洋子, 岡美智代, 他. 手術室見学実習における学びの内容 - 術中レポートの分析 -. 群馬保健学紀要. 2010; 30: 67-75.
- 7) 池田奈未, 百田武司, 植田喜久子. 手術室実習における看護学生の学び. 日本赤十字広島看護大学紀要. 2012; 12: 71-78.
- 8) 溝部佳代, 鷺見尚己, 武藤真佐子. 周手術期看護学実習における手術室実習の有効性 - 学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より -. 看護総合科学研究会誌. 2007; 10(1): 3-14.
- 9) 深澤佳代子. 看護基礎教育における手術室看護の位置づけと教授方法について - 手術室実習について -. 日本手術医学会. 2006; 27(4): 296-298.
- 10) 大滝周, 大木友美, 加藤祥子, 小松亜希子. 看護基礎教育における手術室実習の実態調査. 日本手術看護学会誌. 2019; 15(1): 3-12.
- 11) 山浦晴男. 質的統合法入門 - 考え方と手順 -. 23-78. 東京: 医学書院; 2012.

- 12) 板東孝枝, 雄西智恵美, 今井芳枝, 森恵子, 市原多香子. 手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験. 日本看護学教育学会誌. 2012; 22(2): 13-25.
- 13) Rebecca Saxton, Julie Nauser. Students' experiences of clinical immersion in operating room and emergency department. Nurse Education in Practice. 2020; 43: 1-5.
- 14) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告 大学における看護系人材養成の充実に向けた保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策. <https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf>. 2021年1月10日.
- 15) 帆莉真由美, 小島さやか, 小林理恵, 清水理恵, 小林祐子. 手術室実習の事前学習にICTを活用したことによる学習効果. 新潟青陵学会誌. 2019; 12(1): 36-43.
- 16) 村上大介. 看護基礎教育におけるICT活用と効果に関する文献検討. 日本伝統医療看護連携学会誌. 2020; 1(1): 72-81.
- 17) 葛場美那, 藤原正恵. 我が国の看護基礎教育におけるシミュレーション教育の現状とその効果に関する文献検討. 2017; 1: 9-20.
- 18) 大滝周, 大木友美, 萩原綾香. 看護学生が手術室見学実習を意図的に臨むための教育的試み: 第3報 - 手術室見学実習記録用紙を用いた学習効果 -. 昭和学会誌. 2018; 78(3): 254-263.
- 19) 小澤尚子, 熊谷真衣, 原島利恵. 手術室実習に対する学生の満足感 - 実習形態による比較 -. 日本手術看護学会誌. 2013; 9(1): 50-52.
- 20) 安酸史子. 経験型実習教育 - 看護師をはぐくむ理論と実践 -. 91. 東京: 医学書院; 2017.
- 21) 小島さやか, 小林祐子, 帆莉真由美, 小林理恵, 清水理恵. 周手術期看護学実習における手術室実習の満足度を高める要因 - 実習状況および手術室看護師・教員の指導との関連 -. 新潟青陵学会誌. 2017; 9(1): 63-72.